

氏名	榊原 葵
学位の種類	博士 (学術)
学位記番号	甲 第 71 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則 第 4 条 1 項 該当
学位論文題目	非行少年へのイメージ形成に対する影響要因の研究
学位審査委員	主査 教授 川瀬正裕 副査 教授 加藤大樹 副査 教授 定松美幸

論文内容の要旨

第 1 章では、現在の非行少年の扱いの背景としての非行少年の定義や処遇の流れについて整理し、少年事件に関する現状と世論とのギャップ、非行少年支援についてまとめた。また、非行の背景や立ち直りに必要とされる要因について概観した。

第 2 章および第 3 章では、非行少年との関わりや非行少年に関する知識量などに関係なく、非行少年イメージを測定することができる「非行少年イメージ尺度」の作成を試みた。調査対象者は、実際に非行少年との関わりを持つ職種の者を有識者群 136 名と、非行少年に関する活動などを行っていない大学生 185 名を一般人群とした。その結果、「非行少年イメージ尺度」は、「被害思考性」、「反社会性」、「行動性」、「発達未熟性」の 4 因子で構成されることが明らかとなり、信頼性および妥当性においても認められた。

第 3 章では、有識者群と一般人群の非行少年イメージについても比較検討を行った。その結果、「行動性」では一般人群の方が高い値を示した。有識者群では、非行少年の行動や態度の理由や背景を想像できるが、一般人群では目に見えるわかりやすい行動や態度からの影響を強く受けやすいことが考えられる。一方、「発達未熟性」では有識者群の方が高い値を示した。有識者群の方が処遇の中でより重視している視点であることが考えられる。

第 4 章では非行少年イメージに影響を与える要因として、パーソナリティとロールフルネスを取り上げ、関係性について検討を行う。ロールフルネスとは、「日常生活における継続的な役割満足感 (Kato & Suzuki, 2018)」のことである。ロールフルネスは社会経験や他者との関係に基づく「社会的ロールフルネス」と、役割によって自信や自分らしさなどを得ているという「内的ロールフルネス」で構成される。

対象は 96 名の大学生とした。「日本版 HEXACO-60 尺度 (Wakabayashi, 2014)」と「ロールフルネス尺度 (Kato & Suzuki, 2018)」を使用した。その結果、「外向性」、「経験への開放性」はロールフルネス全体に正の影響を与えた。また、「正直さ-謙虚さ」は「社会的ロールフルネス」に負の影響、「感情性」は「内的ロールフルネス」に正の影響を示した。

第 5 章および第 6 章では、法務省保護観察所とともに、非行少年の立ち直りや自立支援

に関する更生保護ボランティアを行う大学生を対象とした。

第5章では、回想法を用いてボランティア活動を始める前（pre群）と、ボランティア活動を続けている現在（post群）の非行少年イメージの変化を検討した。ボランティア活動を通じて、ロールフルネスは向上し、非行少年イメージ非行少年イメージに関しては、「反社会性」、「発達未熟性」が減少し、「被害思考性」が増加した。

第6章では post群の非行少年イメージ形成に英虚数なる要因について検討した。パーソナリティでは「開放性」と「外向性」が影響しており、ロールフルネスの向上は「反社会性」、「被害思考性」に正の影響を与えた。

他者やものごとに対して興味関心を持って活動することで、様々な気付きや機会を得ることができ、周囲から評価されることも増える。活動の中で関わる非行少年の成長や非行少年との関係性の変化などが、ボランティア活動の中でやりがいや自信などにも繋がっていくことが明らかとなった。また、自分自身への気付きが非行少年への理解の深まりにもつながっていることが考えられる。

第7章では、世間一般の人がもつ非行少年イメージに影響する要因を検討した。対象は、大学生157名とした。使用した尺度は、「HEXACO-60尺度」、「ロールフルネス尺度」、「多次元共感性尺度」、「非行少年イメージ尺度」を用いた。なお、ロールフルネスは「社会的ロールフルネス」の取得と内在化によって「内的ロールフルネス」の成長が促される（Kato & Suzuki, 2018）ため、潜在変数として扱った。

「外向性」、「開放性」、「誠実性」がロールフルネスへ正の影響を与えた。ロールフルネスからは「自己指向的反応」へ負の影響、「視点取得」へ、「自己指向的反応」からは、「被害思考性」と「発達未熟性」へ、「視点取得」からは「発達未熟性」へ、正の影響がみられた。

非行少年との関わりがない一般の人にとって、非行少年イメージには自分自身の感情をもとにイメージを膨らませる必要がある。そのイメージは非行少年の実際の姿や、非行少年との関わりや非行少年に関する知識が増えることで得られるイメージとは異なると言える。よって、「自己指向的反応」を介した非行少年イメージは、スティグマの要素を含むことが考えられるとも言える。すなわち、「自己指向的反応」の抑制が、スティグマの軽減につながる事が考えられる。一方、「視点取得」を介した非行少年イメージは、非行少年自身の立場を想像した上でのイメージである。したがって、より非行少年の実態を理解するためには「視点取得」を介した非行少年イメージの獲得が必要であると思われる。

中でも、「被害思考性」や「発達未熟性」は非行少年のこれまでの経験や非行に至った背景にも関係する重要な要因である。「発達未熟性」は、非行少年との直接的な関わりの有無に関係なく、学校や社会生活の中で想像しやすい内容の因子であったことが考えられる。そのため、相手の立場に寄り添ってイメージすることができたと考えられる。一方、「被害思考性」に関しては、非行少年自身が抱えていると思われる背景や感情まで想像することは難しかったことが考えられる。

第1章から第7章までの研究を踏まえ、非行少年イメージについて考察を行った。

「非行少年イメージ尺度」は非行少年との関わりや非行少年に関する知識量などに関係なく、非行少年イメージを測定することができる尺度であることが明らかとなった。また、様々な尺度と組み合わせて非行少年イメージに関する影響要因について検討することも可能であることがわかった。

第3章、第5章の結果から、有識者群と一般人群、ボランティア pre 群とボランティア post 群で異なる非行少年イメージを持つことが明らかとなった。

第4章、第6章、第7章の結果からは、他者やものごとに対する興味関心の高さはロールフルネスを向上させ、ロールフルネスの向上は非行少年イメージに影響を与えることが明らかとなった。さらに、非行少年イメージに対しては、多次元共感性を通すことで、非行少年イメージに必要な共感性について、より詳細に検討することが可能となった。

今後、「非行少年イメージ尺度」の活用により、非行からの立ち直りや更生において、非行少年自身だけでなく、非行少年の立ち直りや更生の支援を行う有識者や、非行少年について詳しく知らない一般の人々に対する心理教育などに活用していくことが期待される。

論文審査の要旨

1. 総論

本論は現在の非行分野の課題は、更生保護などへの一般認知の低さや、更生後の社会生活での孤立につながりやすい環境などが挙げられ、非行少年に対する処遇は将来に対する再非行・再犯の防止につなげることを念頭に置いて、非行少年のイメージに与える影響要因について検討を行ったものである。

世間一般ではマス・メディアから犯罪や非行に関する情報を得ていることが多く、一般の人は非行少年イメージを持つことが難しく、実際の非行少年の姿と一般の人が持つ非行少年イメージにはズレが生じていることが考えられる。

世の中の一般の人々が、非行少年の背景についても、正しい知識を得ることで、助けを求める少年に手を差し伸ばすことができる社会となると考えられる。そして、そのことが予防的なかかわりにもつながると論じている。

2. 内 容

第1章で近年の動向をまとめた上で、第2章で非行少年のイメージを測定する尺度の作成を行っている。この作業は本論を進めていく上での基礎となる部分で、ていねいに統計的な処理もなされており、完成度の高い尺度を得ることができていることは、評価に値する。第3章ではその尺度を用いて、非行少年についての有識者群と一般群の比較を行い、今後の分析の視点を特定しようとしている。このことで研究の方向性がまとまったと考え

らる。

第4章でのロールフルネスという概念を取り上げている点は、非行少年の実態のみならず、支援につながる視点からの検討となっていることは、この研究の目標とするものを明らかにしている意義があると評価できる。

第5章、第6章、第7章では、非行少年とかかわりを持つボランティア経験の有無などによる変化の検討を行い、さらに一般の群を対象として、非行少年のイメージに關与する要因について詳しく検討を加えている。

これらの研究によって、非行少年のイメージに与える影響要因を整理することが達成され、一般におけるズレの起きやすい側面とそのことの影響、また、今後の非行少年への心理臨床的支援に必要な視点を示すことができている。

以上のように本論文について精査を行い、その意義と達成されている学術的レベルについて学位論文として十分な域にあると全会一致で評価を行った。